

人は変わるか

現代宗教研究所長 三原正資

「アメリカ・ファースト」を訴えたドナルド・トランプ氏が、米国新大統領に就任した。平成二九年一月二〇日（ワシントン）、国会議事堂からホワイトハウスへ、夫人・子息とともに、賛非の声の中を移動するトランプ氏（一九四六年生まれ）は、次のように語っていたという。

「人間は動物の中で最も悪質な存在で、人生は勝つか負けるかで終わる戦いの連続だ。求めるものを手に入れるまで押しまくる。」（産経新聞 一月二一日）

TVは、「求めるもの」をすべて手に入れた勝者の姿を伝えていた。脳科学者中野信子氏は、犯罪者に多いサイコパスは成功した政治家や実業家にも見られるという。サイコパスの脳は「扁桃体の活動が低」く、「扁桃体と前頭前皮質の結びつきが弱い」という（『サイコパス』文春新書 二〇一六）。するどく他者を批判して全く動じない、トランプ氏のあからさまな差別的言動を見るたびに、中野氏の指摘を思い浮かべる。

「求めるものを手に入れるまで押しまくる」トランプという人物の言動が、今後、どのように変化していくのか、大変興味深い。

解剖学者養老孟司氏は、『考える人』（新潮社 季刊）に連載した文章の中で、次のように述べている。

そもそも、「変わらない私」が存在し、それが人間の「本質」であるなら、教育は要らない。本質的に変わらないガキを、どう教育すればいいのか。冗談じゃない。だから若者は育たなくなり（育つとは変わることですからね）、いつまで経っても一人前にならなくなったのである。だから現代では、教育はなんとなく要らないものになった。教育の価値はひたすら低下したのである。教育の本質は「人を変える」ことだからである。

人間の本质についての養老氏の考え方は、仏教の五蘊無我説と同じだ。「人は変わる」ことを前提として、教育も、私たちの「教化」も成り立っている。

一九四六年、ノーベル文学賞を受賞したドイツの作家ヘルマン・ヘッセ（一八七二—一九六二）の名作『シッダールタ』を、このたび、私は五〇年ぶりに読み返した。高橋健二訳の新潮文庫版は、一九七一年の発行から七五刷を重ねる。『シッダールタ』は、第一次世界大戦後の一九二二年刊行された。訳者は〈解説〉で次のように述べている。

思想として解脱を書くことは、すでに二十年もインド思想を研究していたヘッセにとって、さして困難ではなかったであろう。しかし、ヘッセにとっては、作品中に述べられているように、思想やことばは重要ではなかった。救われる体験の秘密が問題であった。

「救われる体験の秘密」、それは誰もが知りたいところである。ヘッセは、『シッダールタ』において、「体験の秘密」を描くために、禁欲や瑜伽の行につとめたという。この小説では、シッダールタは出家以前のゴータマ・ブッダではない。だが、ヘッセは主人公にブッダの幼名を与えることによって、ブッダの体験——人が変わる秘密——に迫ろうとした。

ヘッセは、シッダールタとブッダの出会いを次のように描いた。

彼は注意深く、ゴータマの頭を、その肩を、足を、静かに垂れている手を見つめた。(略) この人、この仏陀は小指の動きに至るまで真実だった。この人は神聖だった。シッダールタは、この人ほどひとりの人をあがめたこと、愛したことはなかった。

しかし、シッダールタは、道をとにもにする友人ゴーヴィンダのように、ブッダの弟子になることはなかった。それは、最初に読んだとき、もっとも心に残った場面の一つである。

もし私があなたの弟子のひとりになりましたら、私の自我が、ただ外見的に、ただまやかしに安心あんじんに達し、救われるだけで、実は生き続け、大きくなるようなことになりはしないか、と恐れます。

と、ブッダに告げて、シッダールタは去った。

「人は変わる」。だが、その変わり方が問題ではないか。五〇年前も、現在も、多くの宗教や運動が社会に渦巻き、人を呑みこもうとしている。私たちは、「変わる」ことに慎重でなければならない。ヘッセのこの作品は、私たちに大切なことを教える。

シッダールタの言う「まやかしに安心に達し、救われる」ことについて、作家工藤律子氏は、その著書『マラス——暴力に支配される少年たち——』(集英社 二〇一六)の中で、警鐘を鳴らしている。

自分は何者なのか。どこに帰属するのか。何のために生きているのか——。疑問ばかり漂う深い霧の中を歩むスラム少年たちに、ギャング団はそれを払拭する機会を、アイデンティティを与えてくれる。ギャング団という「家族」、帰属先を提供され、(略)「役割」を与えられることで、少年たちは自らの存在に対する安心感を得る。

安心や救済と危険な依存の区別は、どこにあるのだろうか。

さて、シッダールタは、誰に依存することもなく、他人から役割を与えられ、支配されることもなく、シッダールタの人生を歩む。

大いに変わらなければならない人、様々の衣服をまとわなければならない人が少なくない。私はそういう人のひとりだ。

と、老いたシッダールタは、老いた友ゴーヴィンダに語る。彼の心の変化、成熟していく内的体験の告白には、ヘッセの把握した仏教の秘密が輝く。

天台大師が法華経を権実や本迹の概念で解釈したことには、仏の教化、「人は変わる」ことこの秘密が示されているのではなからうか。

二〇一一年、現代宗教研究所主催のセミナーで講演したケネス・タナカ師の新著『アメリカ流 マインドを変える 仏教入門』(春秋社 二〇一六)を読んでいると、シッダールタの語った内的体験に通じる一章があった。

タナカ師が事故によって車イス生活続ける信者のクリスティーンさんを励ますために訪ねたときのことだった。

私は立場が逆さまになってしまっているのに気づきました。なぜなら私がクリスティーンのもとを辞した時、会に行った時よりもインスピレーションを受け、元気づけられていたからです。彼女は私にとっても重要なことを教えてくれたのです。

クリスティーンさん、あなたは私にとつてのブツダであり、あなたの言葉は今も私にインスピレーションを与えてくれている——私は彼女にそう呼びかけたいと思います。

今、トランプ大統領はメキシコ国境に「壁」を建設し、あるいはイスラム教国からの移民を制限しようとしている。強権発動のさなか、キリスト教国の中でマイノリティである仏教がおびやかされないだろうか。

世界中に危険なしるしが見られる二一世紀に、さまざまなブラクティス（実践）によって穏やかに人の心を変え、『始聞仏乘義』等に示されているように法華経には「変毒為薬」のはたらきがあるという）、成熟させていく仏教の役割は増々大きくなる。